

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2004年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科	日本文学 専攻
指導教員	所属・職名		氏 名		
	文学部・教授		小 峯 和 明 印		
自然・人文の別	自然	・ <u>人文</u>	個人・共同の別	<u>個人</u>	・ 共同 名
研究課題	医・病をめぐる文芸 — 中世の医薬信仰を中心に —				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科・ 日本文学専攻・後期 5 年		小 野 裕 子 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科・ 日本文学専攻・後期 5 年		小 野 裕 子		
研究期間	2 0 0 4 年度				
研究経費	2 0 0 千円				

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、従来、歴史学・社会学・医史学等の分野からのアプローチが中心であった医療・医学・病を取り巻く事象について、文学研究の立場から考察を試みるものである。従来、先掲の学問分野からは全く注目されていない資料も数多く存在する。それらを個々に検討しつつ、医の始源神話をめぐる言説を軸に研究をすすめる。①オホナムチ・スクナヒコナが、多く薬師仏と習合することで集めた治病信仰の様相、及び、②中国本草の祖といわれる神農への信仰を示す資料の分析を中心に、資料収集・考察を実施した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[医祖神話] [信仰] [医・病]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、従来、歴史学・社会学・医史学等の分野からのアプローチが中心であった医療・医学・病を取り巻く事象について、文学研究の立場から考察を試みるものである。治病の利益を語る仏教説話をはじめ、多くの物語に医・病に纏わる記載を見いだすことができる。それだけでなく、医薬・養生の知識を和歌や物語で平易に説く啓蒙的作品など、従来、先掲の学問分野からは全く注目されていない資料も数多く存在する。それらを個々に検討しつつ、医の始源神話をめぐる言説を軸に研究をすすめた。

日本の医薬の始祖神として祀られるのは、オホナムチ・スクナヒコナの神である。『日本書紀』(神代上・第六)に、この二神が「病を療する方」「禁厭の方」を定めたとする記述が見え、医薬の神として各地に祀られ、日本医学の濫觴を語る近世期の言説にしばしば登場する。これまで、近世期の医学随筆・医学考証資料をはじめ、中世末の日本紀注釈等に着目し、主に学問注釈における、オホナムチ・スクナヒコナにまつわる医の始源説話の再成の過程について明らかにしてきた。そこで浮かび上がったのは、広く中国医学の始祖まで含めた医祖神話をめぐる言説の分析の必要性である。中でも、①オホナムチ・スクナヒコナが、多く薬師仏と習合することで集めた治病信仰の様相、及び、②中国本草の祖といわれる神農への信仰を示す資料の分析を中心に、資料収集・考察を実施した。なお、近世以前の医学資料については、内藤記念くすり博物館(岐阜県)、武田科学振興財団杏雨書屋(大阪府)、西尾市立岩瀬文庫(愛知県)所蔵資料の閲覧・収集を主としている。

① オホナムチ・スクナヒコナと薬師信仰について

オホナムチ・スクナヒコナの二神は病を癒す存在として、多く薬師菩薩と習合し祀られている。病気治療と密接な関わりのある各地の温泉の開基伝承にも、オホナムチ・スクナヒコナ、あるいは薬師菩薩の名は散見する。特に、石動山・白山を中心とする、中世期の能登におけるオホナムチ・スクナヒコナをめぐる信仰は、医祖伝承を考察する上で重要なものである。『神道集』をはじめ縁起や由緒書等から、オホナムチ・スクナヒコナ、及び二神と薬師の結びつきについて考察した。

オホナムチ・スクナヒコナが医薬の始祖として信仰を集める寺社の由来等を記す資料は近世期のものが多く、能登も例外ではない。しかし、オホナムチを祀る白山関連の資料をあわせて考察することで、オホナムチ・スクナヒコナが能登の地勢と深い関わりをもって信仰されたことがうかがわれる。これは、能登における薬師信仰も同様であり、医祖としてのオホナムチ・スクナヒコナをめぐる信仰を考える上で看過できない問題を提示していると考えられる。

② 神農信仰について

神農の伝承は『易経』『淮南子』『搜神記』『史記』等に見え、農業・商業・医薬の祖として伝えられている。日本では、医書等に本草の祖として注釈的に記されるのみならず、中世末には禅僧による神農讃も多く残されており、医師・学僧からその信仰が広がったと考えられる。医師や薬を商う人々によって盛んに信仰され、近世末の道修町でスクナヒコナとともに祀られたことはよく知られている。

研究成果の概要 つづき

オホナムチ・スクナヒコナや薬師等、医薬にまつわる神仏への信仰が病者による病氣平癒を中心とするのに対して、神農信仰は治療に携わる側からのものである。治病信仰の対象でもあったことを示唆する中世の資料も残されているが、その様相は明らかではなく、今後検討する必要がある。

医学随筆・医学考証資料に見られるオホナムチ・スクナヒコナの二神は、病気を癒す神として記されるのではなく、医薬を定めた神である。各地で病者の信仰を集める一方で、医業に関わる者たちの祖としても尊崇されたのであろう。神農とともに描かれた図像も多く見られる。オホナムチ・スクナヒコナを中心とする医祖神話が、学者・医師たちによって再成された過程を考察する上で、神農信仰についても併せて考える必要がある。

近世の仮名草子等には、神農を祀る医師の姿が散見するが、医薬業者のオホナムチ・スクナヒコナへの信仰の様子を窺うことは難しい。医学随筆・医学考証資料等にみるオホナムチ・スクナヒコナ重視の姿勢と、仮名草子等の物語にみる神農礼賛の様をいかにつなぎ、中世から近世における医祖神話の生成について明らかにしていくことは今後の課題となる。

①②は、オホナムチ・スクナヒコナをめぐる医祖神話・信仰の問題を、中世からの変転を意識しつつ、それぞれ異なった観点から調査・考察したものである。この他にも、近世期に多く享受された古医学書の問題についても、各資料の書承関係を中心に調査を進めている。それぞれにさらに検討すべき課題が残るが、あわせて医祖神話の生成・享受の問題として総合的に分析を加えていく予定である。